

批評

【書評】 Hill C. M., A. D. Webber & N. E. C. Priston 編
『野生動物をめぐる対立を理解する—生物社会アプローチ』

Berghahn Books, 2017 年

長谷川 莉帆*

本書は、人と野生動物の対立 (human-wildlife conflict) についての捉え直しを図る論集である。自然科学と社会科学の境界に位置する学際的研究を紹介する Berghahn Books 刊行の論集シリーズの9冊目にあたる本書では、社会人類学、科学史、社会心理学、生態地理学など多様な専門をもつ研究者らが集い、執筆を分担している。

human-wildlife conflict とは、野生動物が人間や家畜・農作物に被害を加え、これに対抗して人間が野生動物を駆除するといった、野生動物と人間が相互に負の影響を与え合う状況を指す語である。自然保護の立場に立つ論者たちは、こうした負の関係が野生動物保護や環境保全の妨げになることを危惧し、野生動物と人間の対立の緩和を目指す研究を後押ししてきた。しかし本書は、そうした従来の研究の多くが生態学的分析にもとづく技術的な解決策の探究に終始してきたことを批判し、より複雑な問題へと目を向けることを促す。野生動物はただ人間と空間を共有し、物理的な干渉をしあう存在であるだけでなく、人間によって何らかの文脈において意味を付与され、価値づけられる存在でもある。さらに現場が「厄介」なのは、被害現場や緩和プロセスを行う場が、そうした動物に対する意味づけの違いを通じて当該地域に関わる人間同士の経済・文化・社会的対立を顕在化させるホットスポットと化しているからなのである。本書は人間/動物という対立構造にどのような第三項が関わっているのか、それによってどのような複雑な関係が作られているのかということをつぶさに見ていくことにより、human-wildlife conflict という語の定義自体を問い直していく。

主著者の一人である Hill は、IUCN の SSC (Species Survival Commission) が組織する human-wildlife conflict の専門家集団の一員である。本書が示す野生動物との接触を契機とした社会的対立を立体的に捉えていく姿勢は、動物と人の共生をめぐる政治的議論の現時点での到達点だといえる。

本書は序章と10章のケーススタディから構成されている。第1～7章では、野生動物をめぐる対立を紐解く様々な視点が事例を通して提示され、第8～10章では、著者らによる被害現場における応用的な実践が記録されている。以下では、本書を前半と後半に分けて、各章の内容を紹介する。

前半部では、野生動物の被害を緩和するためのマネジメントを契機として生じる人間同士の軋轢への着目である。第1章では、社会的な影響力の弱い者たちによる抵抗の手段として野生動物との対立が強調される場面が描かれる。アフリカでは、住民がゾウによる農作物の損害に対して実被害とは不釣り合いなまでの苦情を寄せる一方、被害対策への参加要請に対して積極的な働きを返そうとしない。ここでは、野生動物の保全と引き換えに土地の所有権や狩猟の場の喪失といった不利益を強いられた住民たちによる、野生動物保護団体や政府当局に対する不満の間接的な表明がみられる。第2章で取り上げられるのは、被害緩和策の失敗が人間集団間の社会的分断をもたらしたケースである。日本のサルによる農作物荒らし現場では、サルに定期的に餌を与える公園を設置することで、農地からサルを遠ざける対応策がとられる。公園は観光資源化され盛況を博したものの、依然として猿害が減らないことの責任を農家が観光事業者に押し付けることになってしまったという。

ノルウェーにおける絶滅したオオカミの復活を扱う第3章では、これを「本物の野生の象徴」として歓迎する自

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2024年度入学 共生領域

然保護推進派と、先祖伝来の土地が野生に戻ってしまうことの象徴としてみなす地方労働者階級の社会的対立が描かれる。野生動物をめぐる想像力の異なりが人間同士の分断を生むという構図は、第4章で検討される野生アナグマ撲滅キャンペーンについてもみられる。牛結核が流行したイギリスでは、アナグマが蔓延を媒介する「害獣」であるとして駆除を求める一派とそれに反対する一派が対立する。こうしたアナグマの善悪をめぐる言説が科学的理解によってだけでなくイギリスにおけるアナグマのメディア表象や文化表象の歴史的変遷に沿って構築されてきたことが論じられている。野生動物をめぐる引き起こる人間同士の分断は、動物や人間存在を含む世界認識の異なりに起因する場合もある。第5章では、アマゾンの先住民の動物との関係と、自然保護理念との齟齬が描かれる。狩猟動物を自分たちと同じ感覚を共有する他者とみなす先住民たちは、シャーマンによる交渉や応酬的な狩猟行為を通じた社会関係を動物たちと結んできた。一方自然保護の文脈では、ヨーロッパ=アメリカ社会の自然/文化の二元論的な見方に基づいた「人間と動物の対立」という構図で関係が把握される。環境保全・獣害対策に協働の姿勢をみせる先住民たちは環境活動家と目的を必ずしも共有していない。彼らは環境保全や獣害対策への協力を、地域社会のニーズや生活の変化への適応策と捉えているという。第6章では、こうした人間側の価値志向の異なりが社会心理学的モデルに基づいて分析される。アメリカのワシントン州で個体数を回復させるオオカミに対する態度には、自然や動物への支配主義的志向と野生動物に人間と対等な権利を認めようとする平等主義的志向の二つが影響する。この志向は、都市化や所得の増加、教育水準の上昇と関連して前者から後者へと変化するという。ここで示唆される志向の移り変わりという主題は、第7章で詳しく展開されている。著者は、ウガンダの国立公園の隣接地域で小規模農業に従事する人びとを対象に、農作物を荒らす種にどのような感情を抱いているかについて、17年の期間を空けて二度聞き取りを行う。結果、当初悪印象を持たれていたカワイノシシが、現在はそれほど強く敵視されなくなるなどの変化が見られたが、ヒヒに対する敵対心は変化しなかったという。その背景として、狩猟の合法化により食の禁忌（カワイノシシは好んで食べるがヒヒは食べない）をめぐる位置付けの違いが被害認識に影響した可能性が指摘される。上記7つの論考では、それぞれ当該社会の権力構造（第1章）や観光資源化（第2章）、田園景観の認識（第3章）やメディアへの信頼（第4章）、世界認識（第5章）や社会・経済的地位（第6章）、資源化の可否（第7章）などをめぐるさまざまな分断が、野生動物との接触を契機として人間集団のなかに生じてきたことが描かれている。

本書の後半では、ここまで描かれてきた社会的対立を防ぎつつ効果的な被害緩和を行うためのアプローチに焦点が当てられる。第8章で著者らが提唱するCCT（Conservation Conflict Transformation）アプローチは、技術的解決のみに焦点を当てた従来の介入策と異なり、対立構造の根底にある人間内部の社会的対立の力学を認識し、その変容を通してより良い管理法を編み出していくための枠組みを提供するものである。第9・10章では、実験的な被害対策の導入過程が検討される。現地農民主体の被害対策を取り上げた第9章では、侵入しやすい動物の種類や栽培種、気候条件との兼ね合い、メンテナンスのしやすさなどを加味しながら、農民たちが家族ごとに異なる抑止策を導入する過程が描かれる。事態の変化に合わせて自分たちで再調整可能な対策法を、思案過程を共有しつつ導入することで、村内で対応の差について対立を生じさせることなく、辛抱強く対策を続行できたという。第10章では、GIS技術を用いた野生動物による農作物被害に対する各地域の脆弱性を示すマップ作成の有効性を考察している。マップの作成は、潜在的な問題を利害関係者間で視覚的に共有することを可能にし、議論の焦点を対立から解決策の検討へと向かわせるよう貢献することが指摘された。

本書の意義は、環境の不可逆的な変容に対する危機意識の高まりに呼応した20世紀後半の自然保護礼賛時代を経た、野生動物との共生をめぐる現代社会特有の衝突の現場を巧みに描出している点にある。本書が描くのは、自然保護区の設置など調和的な種の共存を目指す運動が進む裏で、野生動物との以前と異なる接触や軋轢が生じたり、人間社会側の合意形成や実際の遂行過程が難航したりする様子だ。このことは、私たち人間の住まう環境をどのような場と捉え、どのように利用するのか、そして生きる場を共有する野生動物をどのようなものとして認めていくのかという問題に対する正解が、容易に一つには決められないという事実を改めて喚起する。

そうであればこそ、本書が野生動物保護と生物多様性の実現を最終的な帰着点にして、そのための第一歩として衝突の現場を眼差すことに終始している点には不満が残る。本書の断片的だが豊かな事例はむしろ、ときに意図せざる接触を伴いつつ共に生きることの困難を様々な角度から認めたいうで、保護一辺倒の枠組みで考えることを留

保しその可能性について再考するための重要な参照点とすべきである。

本書の刊行後7年を経てポストコロナ時代を迎えた社会は、他者との接触に伴うリスクに一層自覚的になりつつある。人獣共通感染症の報告が相次ぎ、野生動物との接触を衛生的な観点から危険視する声も高まっている。共生をめぐるハードルがますます高まる今、本書は読むべき一冊である。

